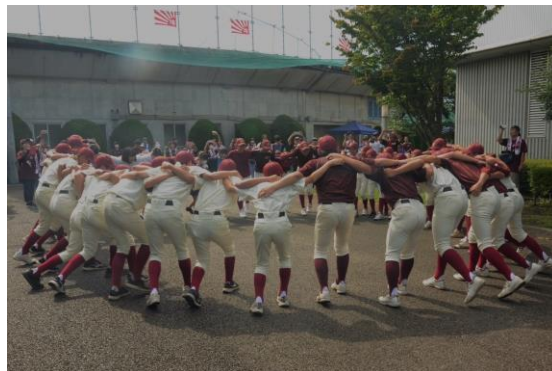


「甲子園」と言葉にしたことで夢から目標に変わった・・・

2024年7月、夏の神奈川県大会3回戦、藤沢八部球場。7回表、0対3、鎌倉学園がリードしていた。2死アウトをとられ、打席には、4番を任されていた副キャプテン。いつも笑顔でチームに大きな声で言葉をかけて雰囲気をつくっていく選手だ。彼はその時も、負けているにも関わらず、笑顔で打席に向かった。そして、力強いスウィングでボールを打ち返した。打球は高く空を舞い、吸い込まれるようにレフトスタンドへ入っていった。ホームランだった。この日、チームで初安打だった。ベンチも応援スタンドも息を吹き返したように盛り上がりを見せた。すると、次のバッターも左中間を超える2塁打を放った。流れが金井高校にやってきた。その裏の守備から、100球を超えても、何とか踏ん張っていたエースも勢いに乗り始めた。連続三振をとり、劣勢だったチームの雰囲気が一変した。9回表、1対3。1死からヒットで出塁。そして、2死ランナー12塁、あと1本で追いつく。試合は互いに白熱していた。2塁ランナーは盗塁のタイミングを計りながらホームへ生還する準備をしていた。バッターはこの日、ファインプレーをみせ窮地を救ってくれた選手だった。思いっきり打った打球はライナーでサードの横を抜けようとしていた。しかし、ショート守備がファインプレーでキャッチアウト。ネクストバッターズサークルには、144球を一人で投げぬいたエースピッチャーが泣き崩れていた。そして、彼らの夏は終わった。相手は、常に大会で上位の成績を残しているシード校だった。その相手に堂々と渡り合い、最後あと一步で勝利のところまで来ていた。彼らは1年前に「甲子園」と言葉に出してから、大会を迎えるごとに目覚ましい成長をみせてくれた。そして、最後まで諦めずに戦い抜くことができた。試合後、応援に駆けつけてくれた保護者や吹奏楽部・チア部・合唱部で結成された応援団や学校の仲間に泣きながらも大きな声で感謝の言葉を胸を張って伝えるキャプテンの姿があった。「ありがとうございました・・・一生懸命がかっこいいと思ってもらえたでしょうか・・・悔しい・・・でも、楽しかった・・・みんなには感謝しかない・・・」と。彼らは、多くの歓声と拍手に包まれていた。多くの人たちが笑顔で声援を送っていた。そして涙ぐむ姿もあった。気がつけば、いつのまにか、多くの人々の心を動かすことができるチームに・・・多くの人に応援されるチームになっていた。ここまでこれた・・・戦績じゃなく、チームとしてのつながりや強さの成長だった。



思い返せば、2023年9月、秋の大会が終わって、彼らは秋の大会で負けた悔しさと俺達でもできるんだという自信をもって、辛い練習にも前向きに取り組んでいた。チームのエースナンバーを背負っている選手は、1年生の頃は、上手になりたいけど、しんどいことや辛い練習をあえてすることを避けていた。それが、負けた悔しさや同級生のライバル投手の成長スピードに取り組む顔つきが変わってきていた。自らウエイトトレーニングを積極的に行い、辛い練習メニューにも自ら前向きな言葉を発して取り組んでいた。それにつられて、同級生はもちろん下級生達の意識もどんどん上がっていった。以前までは全体練習で朝練習を行っていたが、このチームは毎日、各々に朝練習を考えながら行っており、試合でエラーした選手はノック練習をしたり、体力の低い選手はランニングを行ったりと工夫していたため、朝練習を全体練習でおこなう必要はないと指導者は感じ、選手達による課題克服に向き合う時間となっていた。多くのチームは、この時期に春の大会まで、期間が長く、目標を失いがちになり、チームの士気が下がる期間がある。彼らはその時期をほとんど士気を下げることなく活動を続けていった。少しずつ指導者の枠を自主的に超えていく自立したチームと変化していた。

10月になり、それでもチーム内でぶつかり合うことは出てくる。練習の士気が下がり、集中力も緩慢になっている。キャプテンは、チームをまとめることについて、壁にぶつかっていた。悩んでいた彼は、顧問へ相談に行った。彼は自分の負の感情を出さずに「方法」でチームをまとめようと考えていたが、顧問の考えは違った。「腹が立ったら、腹がたつたと言えればいい。」「我慢をして何も言わないのは、相手に何も伝わらない。」「相手を信頼するから、勝つために本音を言う必要がある。だから、想いが伝わる。」そう言われると、彼はスッキリした表情を見せていた。ある日、練習に対する集中力が散漫でガラガラした雰囲気、ふざけた空気、片付けや整備などもさぼっている選手もいた。勝つための練習と呼ぶには、あまりにも程遠い状態であった。するとキャプテンは、ミーティングで自分の感情を冷静に語った。「なんのために練習しているのかわからない。練習をしながら腹が立って仕方がなかった・・・」チーム全員の表情が変わった。普段はニコニコしながら、前向きな言葉がけが多い彼が怒っている。悔しい思いが伝わってくる。チームには、わかっていたようでわからないことだった。その後、キャプテンのもとに3年生達が言葉をかけていく。思いを受けて、返さずにはいられなかった。チームが甲子園という目標を思い出した瞬間となった。また一つチームは成長した。そして、それ以上に彼は、キャプテンとして大きく成長した瞬間だった。



11月、オフシーズン前に強豪私学と呼ばれるチームと練習試合を多く行った。今の自分たちの実力とチームの進み方を評価するためだ。試合を重ねるにつれ、今までは、自分たちで勝手に動揺して、崩れて勝負にならなかったチームが、勝負を楽しめるチームとなった。強豪相手にも物怖じすることなく、挑んでいく。そんな姿があった。そうなる結果は、思う形になってくる。勝利することができるようになってきた。俺達でもできる。やってきたことは間違っていない・・・。そんな雰囲気の中、オフシーズンとなった。12月～3月の間は、体力強化と並行して、ゲーム感覚を磨くことを徹底してやり抜くことにした。ゲームでの力加減を養いたかったからだ。実践形式の練習を数

多くやりながら、スピーディーな試合の進め方や素速い判断力、チームで戦うということを整理して、考える大切な期間となっていた。

3月、卒業式前日、野球部の3年生へ卒業を祝う会を行う。昨年からマネージャーが保護者の撮りためた写真と夏の大会で想いを綴った言葉を載せたメッセージ動画を作成し、みんなで鑑賞しながら、卒業生を送り出している。先輩達が、積み重ねてきたものがあるから、今があることをあらためて実感した。そして、先輩達は、続けることの難しさと素晴らしさを口々に言葉に表わした。その想いを受け取り、選手達は一気に春の大会への勝利に向けて、士気を高めた。



春の地区予選。初戦の相手は、横須賀工業高校。天候が不安定な状態での試合になった。相手は本格派の好投手だった。金井の先発は、3年生のエース投手とその座を1年生の頃から争ってきた選手だ。エースに負ければやりきれないと気迫ある粘り強いピッチングを続けていた。打線も相手の失投を逃さず打ち返す。隙があれば次の塁を果敢に攻めていった。公式戦での緊張感を楽しんでいる様子でもあった。そして、気がつけば先発投手の完封。危なげなく勝利を手にしていった。冬を越えて、ずいぶんとたくましい姿にチームは生まれ変わっていった。そして、いよいよ次の相手は、ブロックで最も力のある強豪の創学館高校だ。打力は高く、神奈川を代表する好投手を擁しているチーム。自分たちがどこまで通用するのかワクワクした顔つきでチームは試合に望んでいた。試合はお互いに一歩も譲らない投手戦となっていた。守備も丁寧に打球をさばき、ヒットになりそうなあたりもファインプレーでカバーする。お互いに点が入らない状態が続く。気がつくと9回。スコアは0対0。ピンチになるも投手の気迫のピッチングで強豪相手に3振を奪っていく。試合に全員が勝つことに集中している。全員がつながっているそんな感覚だった。野球が楽しい…そんな表情で彼らはプレーをしていた。ついに0対0のまま、延長線に入りタイブレーク、ランナー12塁からのスタートだ。先攻は金井高校。一人も快音を飛ばすことなく、何もできずに、終わってしまった。すると、裏の守備では、送りバントを決められ、犠牲フライを打たれ、サヨナラゲームで負けてしまった。どちらも、タイムリーヒットを1本も打たずに勝負が決着してしまった。これまでの金井高校からすると大きな成長だった。確かな成長を実感していた。ただ、それだけではなかった。今回負けてしまったことへの反省はすぐに始まっていた。何とか頑張っている投手のために1本つなぎたい。不甲斐ない…悔しい。そんな思いがこみ上げていた。「甲子園…」言葉にしてから、もはや夢ではなく、少しずつ実現化させるための目標となってきた。

地区予選は、リーグ戦方式だ。1勝1敗で2位になった金井高校は、県大会をかけて隣のブロックの2位校との対戦に勝たなければならなかった。しかし、創学館高校との熱戦を終えて、自信をつけたチームには勢いがあった。序盤から終始リードを保ち、危なげなく県大会出場を決めた。それから、2週間ほど経って、いよいよ県大会、

1回戦、2回戦と連日の試合になる。しかも、抽選の結果、2回戦は地区予選で惜敗した創学館高校だった。リベンジに燃える選手たちだったが、1回戦で先発投手が序盤に制球に苦しみ、先制点を許す。3点リードされたところで背番号1番のエースにマウンドを託すことになった。みごとに後続を抑えたが、打線が繋がらず得点できずにいた。苦しい戦況の中で交代してベンチにいた先発投手は、下を向いて、落ち込んでいる姿を見せていた。しばらくして、攻撃に入る円陣の中で「下を向いて落ち込んでいる投手がいるが、この劣勢の状況をつくっているのは、投手のせいなのか?いや、違う!点をとれていないみんなのせいだ。投手一人に落ち込ませてどうするんだ。何とか勝ちに行くぞ!!」とチーム全体に喝が入った。一気に士気が高まるやいなや、打線が続き始め、一気に逆転に成功して、そのまま勝利した。チームでつなぐ意識がこの結果を生んだのだ。何に対して集中すべきなのか、それが明確になったときにチームは一つになり集中力が上がる。つながる強さが勝利を導くということ学んだ試合だった。そして、2回戦。いよいよ、創学館高校との再戦だ。チームは今度こそはと燃えていた。ただ、その思いが空回りした感じで試合に入ってしまった。先発投手は、1点もやらないとばかり力が入った投球をしていた。案の定、球は上ずりコントロールが効かなくなっていた。ストライクが入らず、ストライクを取りにいった球は甘く入り、簡単に打ち返されてしまう。たまたま、投手の交代、それでも相手の打線の勢いをとめられず、5点を先制される。もう終わりなのか……。ただ、何もせずにあきらめてしまう……。もうそんなチームではなかった。これまで投手に助けてもらってばかり……。俺達がなんとかかすと言わんばかりにすぐさま、2点を取り返した。目標を見失わずにやれることを丁寧に実行する……。そんなチームとは程遠いと思っていたチームが丁寧に1球1球を大切にゲームを進めていた。その後、相手に追加点を許してしまうが、再び先発投手がマウンドへ上がった。その時にはいつものチームにもどっていた。その後は互角以上の戦いを見せていた。8回にも追加点をいれるが、こちらの反撃を何とかしのいでいく創学館高校が上だった。9回が終わって、3対8でゲームセット……。自分達の野球を中盤から取り戻したが、巻き返すことまではできなかった。それでも、あきらめずに相手に向かっていくことができれば、コールドゲームではなく、最後まで勝負ができる。そう実感した大会となった。



春の大会が終わり、3年生にとっては、残り3ヶ月で最後の夏の大会となる。しかし、3年生に進級するやいなや、卒業後の進路についての決断が3年生には迫られる。そして、新入生の入部。1年生は13名の部員が金井高校野球部の方針に賛同して、参加を決意してくれた。さらに体育祭などの大きな学校行事が続いて、学校自体が活気づいていた。そんな中、野球部のキャプテンが体育祭のグループ長である応援団長を引き受けたいとの申し出が顧問のもとにあった。体育祭は夏の大会の1ヶ月前だった。グループの長は、体育祭を盛り上げる大きな責任を担うことになり、事前の打ち合わせや演技練習など、その重責は大きい。周囲の生徒からの推薦により、本人は悩んだ末にその責任を果たしたいとの申し出であった。その話を受け、顧問は大会前の大切な練習で全体練習を休むことや大会に向けての集中力のかける行為があると2年半、1番優先したものが失われる恐れがあることを説明した。もし、体育祭の団長を引き受けるとは、チームに対して経緯を説明すること、チームへの

想い、自分がやっていく行動について決意を伝える必要があることを顧問は彼に伝えた。すると、彼はチームに自分は学校を盛り上げるために団長を引き受けたいこと、応援される野球部になる一つのきっかけになること、全体練習はもちろん、朝練習など自分が行っている練習への取り組みをさらに向上させることを誓った。チームは彼の想いに納得しただけでなく、エールを送って、その覚悟を讃えていた。彼は、そこからまさに有言実行という言葉がふさわしい頑張りを見せていた。チームはますます、大会への闘志を高まらせていた。練習試合では強豪私学はもちろん、大学の野球部とも練習試合を行い、レベルの高いチームと対戦することで甲子園という目標に近づけるように努力を続けた。

7月7日、夏の大会1回戦。対戦相手は横浜瀬谷高校だった。吹奏楽部、合唱部、チアリーディング部が応援団を結成して、応援に来てくれていた。試合前に応援団や保護者、観客の前でスタンドで応援する選手やマネージャーと39名の大きな円陣をつくり、気合をいれる。大きな激がロ々に飛び交う。最後にキャプテンが祈るように全員に向けて、吠える。見ているだけで鳥肌が立ってくる。大舞台を前に緊張とワクワクと入り混じりながら、覚悟を決めて選手達はそれぞれの戦う場所に向かっていった。試合は初回から、攻撃がつながり4得点、4回にも追加点を挙げた。押せ押せムードではあったが、やはり初戦・・・たがいにエラーもあり、地に足がついていない部分もあったが、先発投手が危なげない投球で試合の流れをつくってくれていた。5回から投手は次々と継投し、それに応じて守備も交代していった。控えて甘んじてるわけではないと言わんばかりにベンチにいた3年生は次々と躍動していた。気が付けば、9回、1対5で勝利していた。出場選手は17名。全員で勝ち取った勝利だった。

7月10日、2回戦、相手は横浜翠嵐高校。試合前の球場外で円陣が組まれていた。そこには、吹奏楽部、合唱部、チアリーディング部の部長と副部長も加わり、さらに大きな円陣ができていた。勝つことにチームが大きくなり、勢いが増していく。試合がはじまるとエラーから先制されるが、チームは落ち着いていた。2回には追い付き、4回に一挙5得点の追加点をとると、投手は継投しながら、1回戦と同じ展開になっていった。2回戦も勝利・・・。チームはまだ満足している様子ではなかった。3回戦がシード校の鎌倉学園。その相手に勝つことが最初の目標だったからだ。対戦相手が決まってから、選手達の行動も変わってきていた。部室はきれいに使用されている。ゴミを拾う。整備を黙々とこなす。挨拶を大きな声でする。当たり前だけど、もう一度、足元を正すこと。浮足立って、自分達を見失わないように毎日を生活しようという表れだ。キャプテンは日頃から当たり前のように実践していたが、何回言われていてもできなかった選手も少しずつ変わってきた。本当に応援されるチームへと変わってきていた。だからこそ、1回戦2回戦と勝利していても、まだ勝利への渴望は満たされない。強くなった。すべては、「甲子園」と言葉にしたことから始まった。もうその言葉を口にしても笑う人はいない。夢を笑わずに言葉にして、目標に変える。そこから世界は変わっていく。彼らはもう自分を成長させる方法を学んでいた。もう大丈夫だ・・・。

